

(氏名) 矢野修一	(学部) 経済学部
1 重要事項	
<p>◇書評；</p> <p>高英求『貨幣の制御—流動性の理論・思想史』文眞堂、2020年1月刊（『高崎経済大学論集』第63巻第2号、2020年10月、69-76頁）。</p> <p>西野寿章『日本地域電化史論—住民が電気を灯した歴史に学ぶ—』日本経済評論社、2020年3月刊（『高崎経済大学論集』第63巻第3・4合併号、2021年3月、77-84頁）。</p> <p>◇学会座長；</p> <p>オンラインで行われた日本国際経済学会第79回全国大会（2020年10月17日・18日、主催校・九州大学）の自由論題第3分科会「アジア経済」において座長を務め、発表・討論を円滑に進めた。</p> <p>◇高経大学生と高経附生徒による「高大コラボゼミ」の企画および指導；</p> <p>2010年度～2019年度に続き、日本企業のケーススタディを柱とする「高大コラボゼミ」を企画し、オンライン／対面併用で各種指導を行った。経営支援NPOクラブの支援を仰ぎつつ、学生・高校生による江沼チエン、ヤマトホールディングス、サイボウズ、みやま、デジタルデータソリューションといった全国各地の企業のオンライン訪問・インタビュー（8月21日）をアレンジし、成果発表会（群馬音楽センター、9月18日）につなげた。</p> <p>◇『高大コラボゼミ 2020年度成果報告書』の編集補助；</p> <p>2020年度の高大コラボゼミに取り組んだ大学生の感想・コメントをとりまとめ、成果報告書の編集を補助した。報告書は、高崎市議会議員を含め、関係各方面に配布された。</p> <p>◇高崎経済大学矢野ゼミナール卒業論文集『経済学研究年報』第28号（2021年3月刊）の監修および編集；</p> <p>1994年3月の創刊以来、『経済学研究年報』の監修・編集を継続。2020年度も総勢11名の卒業論文の執筆を指導し、300頁を超える卒業論文集を完成させた。印刷・製本された卒業論文集は、本人のほか、保護者やゼミの後輩らに配付された。</p>	
2 その他の事項	
<p>◇アジア・コンセンサス研究会；</p> <p>長年継続している他大学研究者とのアジア・コンセンサス研究会における発表・討論（7月1日、10月24日、12月26日、2月6日、3月20日にオンラインで実施）を行い、次年度以降の研究につなげた。共編著者としての成果は、2021年度前半に出版予定。</p> <p>◇高校生向け講演；</p> <p>高崎市立高崎経済大学附属高校1年生向けに、ディベートの方法論や考え方について講演を行った。後日行われたディベート大会でジャッジを務めた（10月27日、高経附）。</p> <p>◇市民ゼミナール；</p> <p>高崎経済大学地域科学研究所主催「市民ゼミナール」において、三谷太一郎『日本の近代とは何であったか』（岩波新書）を題材に、「日本近代の来し方と行く末を考える」をテーマにゼミナールを実施した（11月14日、高経大2号館）。</p>	

◇学部ゼミ生向け「就職・進路講話」のアレンジ；

ゼミ3年生向けに、ヤマハ発動機（5月29日）、群馬銀行（7月10日）、アラバマ大学大学院（11月13日）に所属するゼミ卒業生による就職・進路講話をZoomで開催した。イギリス、アメリカで活躍する卒業生3人の話はゼミ生に大きな刺激を与えた。

◇学部ゼミ生向け就活サポート事業；

昨年度は新型コロナ禍によって中止した、卒業生による恒例の就活サポート事業（エントリーシート作成指導や模擬面接など）をZoomで開催した（2021年3月12日）。学生にとっては、オンライン就活の良い経験になったと思われる。

◇群馬県立前橋女子高校スーパーサイエンスハイスクール（SSH）運営指導委員；

運営指導委員会・SSH成果発表会（1月29日）、SSHポスター発表会（3月5日）に参加し、助言や意見交換を行った。

◇ポシビリズム研究会主宰；

1998年から活動を続けるポシビリズム研究会（ゼミ卒業生との研究交流、共同研究を目的とする）は実質的には開店休業状態だったが、大分大学との「世界経済論」合同ゼミ（2020年12月12日、Zoom開催）、卒業生によるその他の研究会を利用し、メンバーと意見交換等を行った。

3 次年度以降の計画・抱負

不慣れなオンライン授業の準備に時間を割かれ、研究面での成果は捗々しくなかった。だが、パンデミックを口実にしてはいけないのだろう。自らの力量不足を痛感する1年であった。次年度前半には、今年度内に形にならなかった成果が公刊される予定であるし、仕込んだネタを活用し、さらに研究成果をまとめていく。

教育面では、デジタルツールに不慣れでオンライン授業では学生に迷惑をかけたが、オンラインの可能性に気づいた点もあるので、次年度以降、うまくデジタルトランスフォームしたい。

県外出身者が多く、中期日程入試の定員が大きな本学、すなわち「不安」と「不満」を抱きがちな学生にあふれる「全国型公立大学」において、充実したゼミ活動などを通じ、次世代を担う若者に向けて「3つの出会い」（「人との出会い」「もの見方・考え方との出会い」「新たな自分との出会い」）の場を提供し続けたい。これは例年通りである。